

## 民具の性質と文化構造

——中国貴州省六枝特区長角ミャオ民具研究を例として——

The Nature and Structure of Folk Implements: The Case of Folk Implements  
Used by Changjiaomiao People in Liuzhi, Guizhou, China

孟 凡行 (余 志清 訳・小熊 誠 監訳)

MENG Fanhang

(Translated by YU Zhiqing, with supervision by OGUMA Makoto)

日本における民具研究の発達に比べ、中国の民具研究の基礎は脆弱なものであるといえよう。初期段階にある研究は、最も基本的な問題から着手する必要がある。筆者の見るところ、おそらく民具の性質、すなわち「民具とは何か」は、民具研究の最も基本的な問題である。たとえこのような基本的な課題であっても、年代、文化、地域ごとに多様性を持つものであるため、改めてもう一度検討する必要がある。

### 一 民具概念に関する議論

#### (一) 日本の代表的民具学者による民具理解

民具という語彙は、日本の民具研究者渋沢敬三によって創出し、はじめて使用された。それ以前、日本の学界では、「民俗品」、「土俗品」などの用語を用いてきた。渋沢敬三の民具定義は1936年アチックミュージアムによって編集された『民具蒐集調査要目』に見られ、民具は「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」<sup>(1)</sup>であると述べられている。この定義は、後の民具学者に計り知れない影響を与えた。

宮本馨太郎はこの定義を踏まえて自らの民具定義を提示し、一般民衆が日常生活の必要から製作・使用してきた伝承的な道具・造形物で、国民文化また民族文化の本質と変遷の解明のために欠くことのできない資料であるといえる<sup>(2)</sup>としている。

民具研究者である宮本常一の民具に対する理解は次の通りである。宮本常一によれば、「民具は有形民俗資料の一部である。民具は人間の手によって、あるいは道具を用いて作られたものであり、動力機械によって作られたものではない。民具は民衆が、その生産や生活に必要なものとして作り出したもので、使用者は民衆に限られる。(中略)民具はその製作に多くの手続きをとらない。専門の職人が作るというよりも、素人または農業、林業、漁業などのかたわら製作しているものである。民具は人間の手で動かせるものである。民具の素材となるものは草木、動物、石、金属、土などで原則として化学製品は含まない。複合加工を含む場合は仕上げをするものが、素人または半玄人であるもの」<sup>(3)</sup>。

岩井宏實は、民具は「身近卑近の道具」であり、それは生活全般に関わり、基礎的な伝統文化の特質を鮮明に示し、日本の民族文化とその歴史変遷を理解するために欠かせない具体的な資料であると指摘している<sup>(4)</sup>。

上述4名の学者の見方は、基本的に日本民具学界の民具に対する理解を代表している。この4種の理解は、すべて一国民俗学の枠組みの下で論じられており、民具の伝承性と日常性を強調している。ここから我々は、日本民具学者の民具に対する認識が次第に深化し、細分化していった軌跡をはっきりと見ることができる。

渋沢敬三の民具定義においては、その所有者が比較的曖昧であり、この定義から我々は、民具が中下層文化を指しているのか、それとも上層文化を含んでいるかを看取できない。宮本馨太郎の定義には、すでに民俗学の枠組みにおける民具の所有者たるグループ——「一般民衆」が含まれていた。これは、民具は中下層文化であることを意味し、上層文化の器具、例えば、宮廷・貴族の器具は含まれていない。この定義はさらに、民具が民族文化の変遷において果たした重要な役割を強調しており、それは当時の日本社会が経験している急激な変化と関連している。文化変遷における民具の重要な役割に関する学説に、その後の研究者は大いに啓発された。しかし、宮本馨太郎の定義の中では、民具が「日常生活」という言葉に限定されており、あたかも民衆の非日常性を排除したかのようである。

宮本常一が民具の中下層文化の本質を強調し、さらに民具の範囲は明確に「生産」と「生活」とし、曖昧な「生活」領域と区別した。また民具は動力機械によって作られたものではないと指摘した。上述した2名の学者とは異なり、宮本常一の定義の中には「造型物」という用語がない。「造型物」は器具だけでなく、建築物や施設を指す場合もある。周知のように民具研究が建築物に言及することは少なく、建築民俗は民具民俗と並列する学術領域である。宮本常一の定義によって民具の範囲がより明確なものとなった。これら3名の学者の民具定義と比べて、岩井宏実はさらに民具伝承の精神性と民具の民俗学資料の価値を強調している。彼は民具の持つ実用性は時代とともに消えていくかもしれないが、民具に含まれている民衆の知恵は簡単に消失することはないと指摘している。

## (二) 中国学者の民具および関連研究内容に対する理解

日本の学界に比べて、中国の民具研究は未だに薄弱なものであり、民具という用語もまれにしか見られない。明確に自身の民具観を打ち出した学者はさらに少ない。張紫晨は、民具について、次のように述べている。「労働者の日常生活に必要な各種の道具・器具などの用品である。民俗学の研究対象としての民具は、主に伝統的で、代々伝承されてきたすべての造形物を指す。民俗学では、往々にして民具を基本民具、準民具、指標民具などいくつかの類型に分け、民具の用途・機能・形態・製作要素によって分類を行う。時間の観点から見ると、民具は概ね伝統民具と現在使用民具、あるいは新民具と旧民具に分類できる」<sup>(5)</sup>

張紫晨の民具定義は、日本民具学の影響を受けているものの、独自の特色も有するものである。例えば、民具の所有者を「労働者」と解釈しており、それは鮮明な中国の時代性を表している。この定義は民具の伝統性と伝承性を強調しているが、宮本馨太郎の定義と同様、「日常生活」という用語を使うことによって、一部の重要な民具を見落とす可能性がある。

許平は、「それ（民具）は、一般的に建築形式以外の各種の実用的な生活用具と施設を指し、民具研究は、日常使用する道具を含んだ広義的な生活と労働「道具」の研究を中心とする」としている<sup>(6)</sup>。許平の認識は、宮本常一と相似しているが、独特なところは、建築物は民具の範疇に属しないと明確に表現していることである。しかし、ここでいう「実用」という言葉は極めて曖昧であり、鑑賞のために用いられた道具（例えば花灯）も民具とみなされるべきである。

以上の、中日両国の代表的な学者の民具概念に関する議論からは、先輩学者は民俗学が従来より

強調してきた伝統・伝承に関して一致した認識を得た他、民具の日常性、手工による製造方法および民具の製作者・使用者・資料性などにそれぞれ強調、重点が置かれる面があることがわかる。これらの認識は、学界の民具に対する基本認識の確認において重要な意味を持っている。しかし、哲学的観点から見ると、上述学者の民具に対する認識は同一の枠組みに基づくもの、すなわち民具を客体的存在物とみなすものである。このような民具の客体化の認識には一定の限定性が存在するか否か。換言すれば、民具の性質の視点から見ると、民具の主体・客体の間にどのような関係が存在するのか。民具の物質性と非物質性がどのような側面に表れているのか。これらの疑問を抱き、筆者が中国貴州省六枝特区梭戛郷のあるミャオ族コミュニティの民具について調査を行った。

## 二 貴州省六枝特区梭戛郷長角ミャオ族における民具文化の概論

ここで使われる主な資料は、筆者の2005年8月、2006年2月～4月の3ヶ月間以上にわたるフィールドワークで得たものである。この調査は、筆者の現在の民具観の形成に極めて重要な影響を与えたものであった。

梭戛郷は貴州省六枝特区に属し、六盤水市、安順市および畢節市の境に位置し、漢族、ミャオ族、イ（彝）族、回族が主要な民族で、プイ（布依）族、コーラオ（仡佬）族、トールン（独龍）族なども居住している多民族地域である。梭戛郷安柱村安柱寨、高興村隴戛寨、小覇田寨、高興寨、補空寨、新華郷新寨村大湾新寨、双屯村新寨、織金県阿弓鎮長地村後寨、官寨村苗寨、小新寨、化董村化董寨、依中底寨などの12の自然村落で暮らしている4,000人あまりのミャオ人は箐ミャオの一支派であるとみなされる。他の箐ミャオと異なるところは、彼らが古くから頭の後部に長い牛角のような、木の櫛の装飾物をつける慣習を有していることであり、人々は彼らを「長角ミャオ」と呼び習わしている。この支派のミャオ族は長年高山石漠地帯のやや閉鎖的な環境に暮らしているため、今日に至るまで多くの伝統文化資源を保持することができ、その中の多くは、伝統的な民具である。

### （一）梭戛郷の生態環境と民具

梭戛郷は三岔河流域北岸の深山地帯に位置し、標高1,600m以上で、かつて森林が広く分布していた地域である。長角ミャオは箐ミャオの一支派で、箐は大森林という意味で、箐ミャオにふさわしい解釈は「大森林に暮らすミャオ族」となる。長角ミャオ人によれば、彼らの生活区域はかつて「黒陽大箐」と呼ばれ、それは濃密な樹冠が太陽の光を遮断し、森の中は一面の漆黒に覆われているという意味である。このような生態環境は20世紀60年代まで続いていた。その後、森が広い範囲にわたって破壊され、採集と狩猟が日ごとに減って行き、代わりに農耕がその主要な生産様式となった。

梭戛地区の年間降水量は1,467mmであり、さほど少なくないが、この地域はカルスト地形に属しており、地下に漏斗・岩窟が多く、保水層が不足しているため、地表の水資源は乏しい。毎年旧暦の10月から次年の4月までは渇水期であり、飲用水を確保することは困難である。

所在する地域の生態環境は、必然的にその土地の人が暮らしを立てる一連の器具の発生を促す。梭戛の地理と生態環境が、長角ミャオの人々に採集・狩猟（現在は存在しておらず）・農耕といっ



図1 梭戛長角ミャオの村 孟凡行撮影2005年8月にて



図2 晴れ姿で歌い踊る長角ミャオ人 孟凡行撮影  
2006年3月にて

実、塊茎、昆虫と各種の動物を供与したのみならず、長角ミャオ人に各種の器具を製作するための材料も提供した。現地で材料を調達することは、多くの採集・狩猟社会と農業社会の人々が民具を製作する場合の基本的な特徴であり、長角ミャオ人も同様である。長角ミャオ人の民具に用いられた材料は主に、木材、竹材、藤材、および石材などである。

梭戛地区によく見られる樹木は、杉、楸樹（ノウゼンカズラ科の高木）、漆の木、枸皮の木、棕櫚の木などがあり、中でも杉の用途が最も広く、用いる量も最も多い。したがって、長角ミャオ人は杉に対する記憶が最も深く、杉はその「開路歌」と「孝歌」（喪歌）の中に最も多く使われる樹木である。

長角ミャオの居住区域に育つ竹は、主に、金竹、棘竹、苦竹、釣魚竹などの種類である。民具製作に関していえば、最も広く用いられるのは金竹である。金竹は強い弾性を持つため、背負籠、ザルなどの器具を編むのに適している。棘竹は主に現地の人の葬式に使われる竹卦（一種の祭礼用具）の製作に用いられる。または長角ミャオは、かつて竹に刻み物事を記録していたが、その竹も棘竹を使っていた。さらに家造りにも用いられる。棘竹は我々が収集した長角ミャオの「開路歌」の中に唯一使われた竹類で、おそらく棘竹の祭礼的用途によるものである。苦竹と釣魚竹は主に嘎房<sup>(8)</sup>の建造に用いられる。

藤材は密林に育ち、現存する長角ミャオ人の民具を見てみると、大量の葛は馬が貨物を背負うための籠を編むのに用いられ、他の物には用いられることは比較的少ない。葛はかつて非常に重要な「縄」であり、一本の葛を単独で用いる場合と、比較的太い葛を剥がして撚り合わせた縄の場合もある。隣村のプイ族の人々は現在なお藤のつるで編んだ箸籠を使っているが、長角ミャオ人の箸籠の多くは金竹で編んだものである。その他には民俗的用途もある。例えば藤の首飾りを編んで、新生児の首につけ、平穩無事を祈願する。

梭戛地区では石材資源が豊富であり、最も多く民具製作に用いられるのは青石と砂石で、壁や家屋の建築に多用される。砂石は硬度が比較的が高く、石臼を彫り、唐辛子を碎き、生薬をすり潰すのに使われ、また米をつくための臼を作るのにも用いられる。

地域の生態環境は現地の人々に各種の器具を製作する利便性を提供するが、器具もまた逆に環境に影響をもたらしており、これらの影響は現地の人々の行為を通じて顕在化するものである。「地理学者と人類学者はもはや人類を、環境によって作られたものとは見ておらず、ある地理学者が指摘したように、一種の『地勢を変える力』と見ている。人類はただ消極的に世界各地に暮らしているのではなく、環境を変える主要要素となっている<sup>(9)</sup>。」長角ミャオ人がナタを作るようになった

た生産様式を選択させた。この生産様式が各種の民具の発生を促した。すなわち、長角ミャオ人の先人たちは密林地帯に暮らしていたため、必然的に弓矢・ナタなどの自衛、狩猟のための道具や、道を開くための道具が必要となった。また、耕作に従事するために、犁・鋤などの農具が必要となる。水不足の状況と険しい山道が、背負い桶、背負子などの運搬用具の創出を促した。

無論、「環境は多方面にわたって人々の成果を制約する一方で、人々のニーズを満たすために物質を提供する」<sup>(7)</sup>のものである。梭戛の山林は採集・狩猟時代に、長角ミャオ人に野生の果

ら、密林の中に何本もの道を切り開くことができ、またナタを火と共に使うことで、焼畑農業も可能になる。弓矢があれば以前よりも多くの獲物を捕ることができ、斧と鋸があれば大量の木を伐採することができる。鋤と犁があれば、以前よりも多くの土地を耕作することができ、さらに規模の大きい棚田を築くこともできる。より先進的な近代器具があれば、山を開いて石を採掘し、家屋を築き、道を造ることができる。人口が少ない採集・狩猟あるいは焼畑農業の時代には、人々の生態環境に対する要求には限りがあったため、生態環境への影響も限定的であった。人口が膨れ上がるにつれ、大量の森と牧草地が耕地に開墾され、ついに黒陽大箒（地名）が荒れ山やはげ山に「改造」されたのである。その後、人々は生態の重要性を認識するようになり、再びこれらの器具を使って悪化した環境を改善するようになった。木の苗を植え、一定期間の伐採や放牧を禁じ、樹木を保護し、生態環境に新たな変化を生じさせた。

## (二) 梭戛長角ミャオの民具群

上述の民具定義に対する分析から、民俗学の枠組の下では、民具が多くの場合民俗学の研究資料とみなされていることがわかる。したがって、結局のところ民具研究とは民を研究するものとなる。ならば、我々が考える必要があるのは、いかなる方法で民具を通じて民を研究するかということである。最も直接的に考慮すべきは、おそらく、いかなる民具がある民族（あるいはエスニック・グループ）の生産と生活を支えているかということであろう。一つあるはいくつかの民具のみをとりあげるものではないことは明白であり、その民族あるいはエスニック・グループが取り入れるすべての民具であり、特定の呼称を用いて表現するならば、それは「民具群」と呼ぶことができる。したがって、民俗学的な意味における民具研究は民具群の研究であるべきで、ある一つ、あるいはいくつかの民具の研究ではない。もしその民族（あるいはエスニック・グループ）の個別の民具について研究するのであれば、それは民具群の枠組の下で行うべきである。民具群はまたいくつかの組合せに分けることができ、これら民具の組合せの下にあるものこそは、独立した機能を持つ民具なのである。

### 1. 木工民具の組合せ

木工民具は本来生産民具の組合せの一部であり、それを単独の一つの種類とするのは、それが現地においてかなり体系的な専用道具となっているからであり、梭戛民具の「元」となる器具であるからである。長角ミャオ人は、これらの木工民具とその身につけた技術を利用して、一族の人々が使用する数多くの重要な民具を製作した。異なる長角ミャオの木工職人が作った同一種類の木工道具は大多数が同じで、形状と構造がほぼ一致しており、寸法にほとんど差異はなく、これらの違いも手作りの制約により生じたもので、その機能には決して影響しない。これらの道具は多くの場合、代々伝承されてきた伝統の形式であり、製作者個人の創造性が示されることはめったにない。木工民具は斧、かんな、墨壺、のこぎり、矩尺（魯班尺または直角尺）、鉗釘（一種の木工の固定道具）、木槌、木馬（樞、一種の固定および支えのための道具）、鑿、踩脚（一種の穴を開ける道具）、罫引、ナタなどがある。これらの道具が長角ミャオの木工職人によって総合的に利用され、家屋を建て、棺桶、甑子〔蒸籠——訳者注〕、家具などを製作するのに役割を果たしてきた。それらの中でも

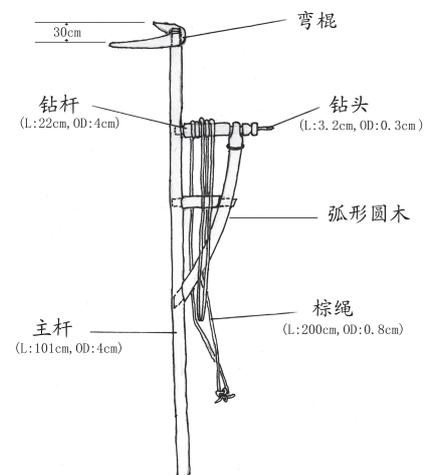


図3 踩脚 孟凡行繪

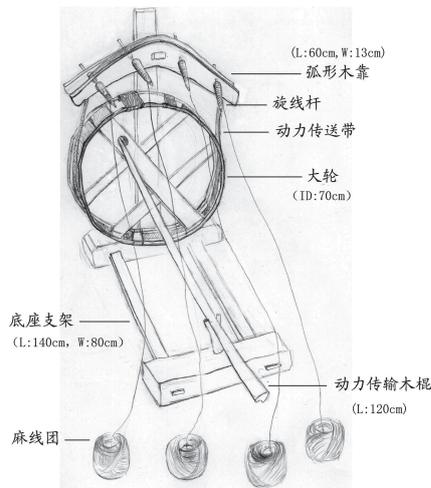


図4 麻織機 孟凡行絵

斧と木馬はとりわけ注目する価値がある。なぜなら、斧は長角ミャオの木工職人の最も重要な道具だからであり、長角ミャオ人は木工職人が器具を製作することを、〇〇を「叩き切る」と呼んでおり、他の動詞を使うことはない。ここから、斧の役目の一部をうかがい知ることができる。木馬には特有の伝説があり、これは長角ミャオ民具の中でもほとんど類を見ないものである。

## 2. 生産民具の組合せ

長角ミャオ人の狩猟民具は、主に弓矢、ナタ、火薬銃などがある。中でも弓矢が最も重要である。現在は滅多に見ることはないが、しかし長角ミャオ人の弓矢への記憶は依然として確かにして豊かなものである。弓矢はまた、長角ミャオ人の葬送儀礼に用いられる重要な祭器の一つである。

耕作民具は犁、鎌（形状と機能は唐鋤と似ている）、馬鋤などがある。中でも犁が最も重要であり、その付帯道具には牛夾担（牛の軛）、牛搭脚（床）と、連結用の縄などがある。長角ミャオ人が田畑を耕す前に、木工職人に犁の道具の修繕を依頼し、使いやすさを確保する。耕作に出かける途中、背籠〔背負い籠の一種——訳者注〕を使って犁を背負う習慣がある。田畑を耕す際には、片手で犁を起こし、もう一方の手で牛を操る。終わった後は、犁の刃をきれいに拭き、犁一式はすべて母屋の後ろの壁に吊るしておき、風雨をさげ、非常に大切に扱われる。

その他の民具の組合せ、例えば収穫民具には鎌、背負い籠、撮箕（ざる）、夾棍（唐竿に類似する脱穀道具）、竹錐錐（トウモロコシの葉を剥がすための専用の道具）などがある。食糧加工のための民具には、石臼、甑子（せいろ）、分飯簸簸（一種の丸いざる）、研碓（唐辛子をすり潰す専用の石材の道具）、碓窩（米をつく道具）、粳粳盆と粳粳槌（餅をつく専用の道具）などがある。家畜の飼育に利用する民具には鎌、砥石、豚牛の餌入れ、鶏籠などがある。鎌は多くの地域では収穫農具に属しているが、しかし長角ミャオ人の鎌は主に草を刈って餌として豚牛に与えるため、家畜飼育民具の範疇に入る。紡織・染織・刺繍に用いる民具は主に紡糸機、糸繰り機、機織り機、染織用のかめ、画蠟刀〔ろうけつ染め用の小刀——訳者注〕、針などがある。

## 3. 生活民具の組合せ

長角ミャオ人の水汲み器具にはひしゃく（ひょうたんのひしゃく、木のひしゃくなど）、背負い水桶、天秤棒などがある。梭戛地区は慢性的な水不足で、そのうえ一族の人々は皆、山の斜面に居住し、水源はほとんど山裾にあり、山道が険しくて歩きにくいいため、水背負が盛んに行われている。水背負の主な器具は木製の水桶で、女性が中心的な役割を果たしている。一人前の長角ミャオ女性は皆一様にずば抜けた水の運搬技能を持っており、水が満杯に近い状態の桶を背負っても「山越え谷越え」をすることができる。それでもなお水は溢れることも漏れることもせず、水を空けるときには桶を肩から降ろすことなく、さらにそれは一定の速度をも求められるものである。

炊事道具には、土炉、鍋（かつては陶器の鍋が使われていた）、碗（以前は木碗であった）、柄杓、盆、木製杓子、箸の籠、碗の籠、唐辛子針（唐辛子をあぶる道具）などがある。中でも土炉が最も現地の人に重要視されている。土炉は家族の中心であり、とりわけ寒い冬には、家族が家に入るとすぐに土炉を囲んで暖を取る。土炉は料理を作り、ご飯を炊く他、もう一つ重要な役目を担っている。それは土炉の上方にある屋根裏部屋においてあるトウモロコシの湿気を取り除くことである

(この地域は湿度が非常に高いため、湿気を取り除かないと、主食とされているトウモロコシにカビが生えて腐ってしまい、家族の人々が飢えてしまうのである)。そのため、長角ミャオ人の土炉の火は一年中絶えることがない。

その他の生活民具、例えば洗面用具、家具、照明器具は比較的普通のものであり、木盆、腰掛け、長椅子、シンプルな木卓、戸棚、ひまわりの茎から作った松明、石油ランプ、懐中電灯などがある。

#### 4. 交通運送民具の組合せ

担ぐ行為は長角ミャオ人の主な運送手段であり、長角ミャオ人にとって背負運送民具は極めて重要な意味を持つ。そうした背負用の運送民具には主に背負子、背負籠、背負桶などがある。

背負子には2種類があり、一つは階段式背負子で、もう一つは椅子式背負子である。両者の機能は異なっており、前者は草、トウモロコシの藁などのような、かさが大きく軽量のものによく用いられ、後者は石塊、コンクリートなどかさが小さく重さがあるものに用いられる。背負子の付帯道具には、トウモロコシの葉で編んだ背当てがあり、それはベストに似ており、背中の不快感を軽減するのに有効である。さらに冬には防寒の作用もあり、そのため、一部のミャオ族、とりわけ中高年の男性は作業をするときによくこの背当てを身につけて、作業の合間にも脱ぐことなく、まるで衣服のように扱われている。背負子、とくに椅子式背負子で石塊を背負うのには一定の技術をマスターする必要がある。なぜなら長角ミャオ人は背負子から石を空けるときには背負子を肩から下ろすことなく、そのまま振り下ろすからである。石が重いため、相当な技術を持たないと、一連の動作をスムーズにやり終えることは困難である。背負籠は食糧、肥こま、石炭などを背負うのに用いられ、背負桶は水を背負う場合のみに用いられる。

馬車装具には馬車用具一式があるが、その数は多くなく、現れた時間も遅い。それは、20世紀90年代以前、長角ミャオ各村にはまだ馬車を走らせる道がなかったからである。長角ミャオ人に最も大きい影響を与えた馬具は、馬が石炭を背負う際に使う専用の背負子と背負籠である。長角ミャオ人は土炉の火を一年中絶やさせないため、石炭は彼らにとって極めて重要である。山道は険しく、車を走らせることができず、馬に背負わせて運ぶしかない。駄籠は、連結している二つの横の切断面が楕円形となっている籠であり、使うときはまず駄架を馬の背中に置き、固く括りつけ、さらにその上に背負籠を置くと、安定して動かない。荷鞍と荷籠は、長角ミャオ人の馬隊による石炭運搬の歴史の証人となったのである。

#### 5. 学習娯楽民具の組合せ

長角ミャオ人が学校教育を受けるようになったのは非常に遅く、20世紀60年代以降のことである。そのため、彼らは自らの伝統的な学習用の器具を持たない。娯楽器具は児童用の玩具と、成人用の娯楽器具の二つに分けられ、児童用の玩具には童車、紙鈔、短棒、小石などがあり、それぞれの玩具に特有のゲームがある。これらのゲームは、体力をつけ協調性を養うことを目的としており、子供達の成長と学習に有益な活動である。成人用の娯楽道具には、キセル、蘆笙ろしょう〔竹製管楽器——訳者注〕、竹笛、口琴、木葉（一種の手作り楽器）などがある。キセル以外はすべて楽器である。成



図5 背負子と背当て 孟凡行撮影 2007年3月にて

年者がよく大勢集まって共に娯楽を楽しむが、一部の活動は若い男女の配偶者選択に絶好の場所と機会を提供するものとなった。

## 6. 代表的な民具

あるコミュニティの民具に対して全面的、系統的に考察と叙述を行うことは、民具研究の基礎であり、さらにはその「代表的民具」を探り出すことが求められる。これらの民具は現地の人の生活に重要な影響を与えるのみならず、現地の人々の知恵と精神の重要な具現化の形式でもある。では、どのようにこれらの代表的な民具を探り出せば良いのか。筆者が民具の考察と研究を遂行する中で感じたのは、民具は現地の民衆と密接な関係を持っている以上、これらの民具は文字で記録され、または口承文化として伝承される可能性が高いということである。長角ミャオ人は自らの文字を持たず、他の言語による文献記録も皆無であるため、やむなく彼らの口承文化から探らざるをえない。長角ミャオ人の場合、例えば長角ミャオ人の各種の歌、とりわけ長角ミャオ人の中心的な文化とみなされる葬送儀礼の開路歌、およびミャオ族の「史書」とよばれる服装・装飾文様などがある。

長角ミャオ人の開路歌（大部分の民具は開路歌に出てくる）、酒令歌、孝歌、山歌に出てくる民具には、土炉、木盆、柄杓、木櫛、棺、門、背負桶、背負籠、弓矢、ナタ、戸棚、木の腰掛け、蘆ろう笙しょう、煙管、ラップなどがある。一方、長角ミャオ人の刺繡文様図案の中には、杓、斧、犁、蘆笙、確窩、鉗鉤（一種鉄材の木工固定用道具）などの器具の抽象的な文様がある<sup>(10)</sup>。これらの器具はすべてミャオ語の名称があり、実用的な重要な機能を持つのみならず、深い文化的意味も有しており、長角ミャオの民具の代表であるといえる。

日本の比較民具学の分野では、異なる二つの民具群に属する大量の民具に対して、全面的な比較研究を行うという難題を解決するために、河岡武春が二つのコミュニティの基本的民具を用い比較を行う構想を提示した<sup>(11)</sup>。しかし、基本的民具の範囲を定めるのは困難なことである。筆者は、上述した代表的民具の構想は、比較民具学の発展のために、一つの手がかりを提供することができると思う。

### (三) 民具の製作

長角ミャオ人の民具製作の技術は主に木作り、竹編み、石作り、紡・織・染・繡・縫などの方面に集中している。人々の理解の中で、木作りが最も重要な器具製作技術である。そのため、職人の中で木工職人は大変な名望を得ている。こうした分野の製作技術は、我々から見ると複雑なものではないかもしれない。例えば木作りの技術は叩き切る、削る、彫る、削るなどの技術の集合にすぎない。竹編みの技術もごく普通のもので、製作するのはほとんど「深めの籠」、[浅めの籠]のような見慣れた器具である。石作りは主に壁を築く、確を彫る、および石臼を修理することに集中している。紡は、一般的な麻織であり、織は、平織機で360本ほどの縦糸を織った細布であり、染は、ミャオ族で見られたろうけつ染めであり、繡はすなわち一般的な十字刺繡である。しかし、これらのごく普通の技術は、長角ミャオ人の民具製作を支えており、彼らの生産と生活を支えているのである。したがって、文化的な意味から見ると、これらの技術は現代都市の人々の生活を支えているハイ・テクノロジーと同等に重要といえる。

筆者は調査において、長角ミャオ人の民具製作技術の三つの特徴を見出すことができた。一つ目は男性が木作り、竹編み、石作りに従事するのに対して、女性は紡織、ろうけつ染め、刺繡に従事しており、男女の差があることである。二つ目は長角ミャオの木工職人が「叩き切る」という技術を多用していることである。三つ目は民具製作の技術は師弟間で継承されるものではなく、多くの場合は独学であり、大部分の人はモノに学ぶのだと述べている。

伝統的な意味から見ると、長角ミャオ人は民具製作の際、まず民具の機能を考慮する。その次は材料コスト、人体構造（すなわち現代の工業技術における「人間工学」）、見た目の美しさなどの要素も考慮のうちに入れる。しかし、費やした時間を考慮する人は減多にいない。彼らはしばしば休みをとりながら作業しており、あるいは遊びや農作業、来訪者などのために作業を中断する。つまり、長角ミャオ人は民具製作のために、減多にまとまった時間を使わないのである。

#### （四）民具の流通

民具の流通は、民具研究の重要な内容である。長角ミャオ人の民具を研究する中で、筆者は以下の問題に注目している。一つ目は各村人の中の民具流通、例えば職人が一族の親戚のために製作した民具など。二つ目は民具の借用と現代的民具の賃借、三つ目は外来道具が現地の文化へもたらす影響である。一族の中の民具流通は一種の感情維持と交流の手段であり、職人が名声を高める手段でもある。一方で民具の借用は、村あるいはコミュニティ全体の営みを正常に維持するための有効な仕組みである。長角ミャオ人自身の民具利用には賃借の習慣は存在しないが、それは近年導入した現代的動力機械の利用には適用しており、このような機械によって生じた新たな族人の人間関係には、長角ミャオ社会構造を変える勢いが大いにある。

#### （五）民具とエスニック・グループのアイデンティティー

この課題に関しては、多言を要するものではなく、服飾の事例がその証左となるものであろう。ミャオ族には支系が多いが、中でもとりわけ服飾が支系を識別する指標となっている。梭戛地区には歪梳ミャオ、花背ミャオ、長角ミャオなどのエスニック・グループが暮らしており、人々はまさしく服飾によって彼らを区別し、彼らもそれをよって自他の区別をするのである。歪梳ミャオは後頭部の髪に一本の櫛を斜めに挿しており、花背ミャオの服飾の背中には印章に似たような方形の文様がある。長角ミャオは、髪にまさに牛角状の長い木櫛を差している。

#### （六）民具が人にもたらす反作用

人々が民具を製作して、使用し、長い時間が経つと、民具は伝統文化となっていき、かえって人々の身体と精神に影響をもたらす場合がある。長角ミャオ人の中高年者の大部分は膝の痛みを持つが、これは長期にわたって重荷を背負いながら坂を登る生活と大いに関係がある。大部分の老人の腰はひどく曲がっており、これも長期にわたって重い荷物を背負い、また田畑を鋤き起こし、鋤き返し、草を刈り、種まきをするなど、長時間腰を曲げる必要のある農作業に従事することによるものである。長期の野外作業はまた、彼らの皮膚をかさかさにし、手足を太くさせた。長角ミャオの女性には二つの典型的ともいえる動作があるが、一つは歩くときは身体が前後にすこし揺れる姿勢であり、もう一つは両手を腰に当てる立ち姿勢である。これは水や他の重い荷物を背負う作業（両手を腰に当てることで上半身の支える力を強化できる）と一定の関係がある。

#### （七）民具の生命史

一つの道具はその最初の機能を失うと、道具としての生命を全うしたとみなされる。しかし、もし幸いにも他の用途に転用できるならば、それはまた再生を得ることができる。長角ミャオの数多くの、早くに淘汰されてしまった伝統的な民具、例えば弓、木柄杓、荷籠、石臼などは、その機能からすれば、すでに命がないとみなされる。しかしながら、陳列館に置き、陳列品として展示する機会が得られたならば、もう一度生を受けることとなる。ただし、その機能は完全に変化したとい

えるだろう。これらの民具は周囲の人々と新たに異なる関係を結ぶこととなるのであり、かつて主に現地の人々の生活の役に立っていたものが、現在は主に外部の人々（観光客）の役に立つこととなる。無論、民具の生命史研究は、民具の生死という肝要なところのみに限定されることなく、民具群の考察、民具群内部の各組合せ、または個別民具の生命の過程と軌跡をも考察すべきである。

その他、例えば民具の収納と保管、民具と民衆の職業アイデンティティーと地域アイデンティティー、民衆の民具に対する感情なども、筆者が注目した長角ミャオ民具研究を構成するものであるが、紙幅に限りがあるため、詳しい論述は割愛させていただく。

長角ミャオの民具の研究を通じて、我々は民具が単に「身辺卑近の道具」だけではなく、また「労働人民の日常生活に必要である各種の道具・器具などの用品」のみにとどまるものでもないことがわかる。民具は、それらが所在するコミュニティの生態環境・社会構造の維持、人の社会化、文化の伝承、エスニック・グループのアイデンティティーなどと密接な関連を持つといえる。民具は、一種の総合的な存在として、その本体以外に、その使用方式、特に民衆自らの民具に対する記憶と理解をも含むものである。民具はまた一種の地域的な知識でもあり、その背後にある「語りのルール」および精神的な意味と結びつくことで、はじめてある民族あるいはエスニック・グループ、コミュニティの民具となるのである。

さらに文化進化の観点から見ると、民具は経済と社会の発展に従って進歩し、民具の機能・様式もますます多様化していく。しかしこれと同時に、民具の周辺環境への依存度も一層強くなっていく。以前は一つあるいは数少ない民具で果たしていた役割に対して、現在では数多くの民具を用いる必要があり、協同してはじめて成し遂げるものとなっている。このような状況のもと、民具を具体的に使用し、それが本来存在する環境におき、そして民具と人の関係という観点から観察するならば、おそらくさらに深い理解を得ることができるであろう。このアプローチこそが、まさに我々の考察を促したのである。つまり、おそらくは先輩学者達の、客体的角度から民具を取り扱い研究するという方法を修正する必要があり、そして、関係性の問題、とりわけ主客体間の関係の角度から民具を取り扱い、研究する必要がある。

### 三 民具関係

関係性の角度から考察するならば、我々は民具を文化実践の一つの中間的なポイントとしてみなすと良いだろう。その上部につながるものとは民具を製作する人であり、そして民具の材料と関連する自然生態であり、その下部に存在するのは人が民具によって行われた活動である。この過程を貫いているものは、人々の民具に対する使用方式と使用方法である。このような考えにもとづき、筆者は自身の民具実証研究の中で、「民具関係」と民具文化構造から着手するという戦略と方法を取った。

民具研究の究極の目的は人であり、その主な手段は「関係」である。概括すれば、例えば民具と自然環境の関係（材料、自然への改造、廃棄物処理など）、民具自身の構造関係（形状、製作工芸および歴史、美意識）、民具と人および社会の関係（人口、物理と社会機能、民具が人の身体と精神を形作りコントロールする作用、人工知能、民具による人の世界観と価値観に対する影響、信仰と祭祀、感情、礼儀と儀礼、民具と技術および社会構造、社会階級化、メンツと人間関係、資源争奪と権力分配、消費、流通）などである。注意すべきは、これらの関係は双方向のインタラクティブをともなう関係であり、人間が器物を製作・使用する一方で、同時に人間もある程度において物質化されるということなのである。したがって、民具学はある意味では民具を通して人間と自然の関係を研究する学問である。全体的な文化理解および地域文化の独特性を深めるために、区域間の文化の比較を行う場合、

異なる文化地域における民具、技術本体の異同に注目する他、より重要なのは「民具関係」の差異を探ることであり、そして「民具関係」の研究は、構造の角度から着手することで、より高い実操作性があるといえる。

#### 四 民具文化の4層構造

民具にはその自らの文化構造を有しており、筆者は少なくとも4層の構造が存在していると考えられる。一つ目は個々の民具の構造、すなわち個別の民具の材料、形状、構成と製作工芸である。二つ目は民具の組合せの構造、すなわち民具の組合せ間の関係である。各民具組合せは一定の安定性を持つが、しかし実践活動は多面性を持つものであるため、こうした組合せは必ずしも完全に固定的なものではない。小さい民具の組合せは大きな民具の組合せを作ることもあり、例えば耕作民具には、すきおこし、種まき、灌漑などの民具の組合せが含まれている。したがって、我々は民具の各組合せを序列化してよい。例えば一級民具組合せ、二級民具組合せなど。一級民具組合せは民具組合せの最高級である。例えばすべての生産性民具組合せが一級生産民具組合せを作り、すべての生活性民具組合せが一級生活民具組合せを構成する。三つ目は民具群の構造、すなわち一級民具組合せ間の構造関係である。四つ目は民具と他の文化事象（例えば生態環境と上述した民具、人および社会のインタラクティブな関係）の間の構造関係である。民具文化の4層の構造理論は民具（とりわけ基本民具と代表的な民具）の本体研究を重視するのみならず、さらに民具のある地域の社会歴史および自然生態の大きな環境の中におきながら、文献研究とフィールドワーク相互に実証する方法を用い、民具組合せと民具群を基礎とした総合的研究を強調するものである。この過程において、民具の製作と使用する技術（手工芸）、人々の器物に対する認識（意識）などが終始貫かれている。

民具研究の趣旨は民具と技術を研究することだけではなく、民具と技術を手がかりおよび資料として、人類の文化、自然、社会史を整理、発掘することにある。これを基礎として、異なる地域、ひいては異なる国家間の比較民具文化研究を行うことによって、おそらく物質文化の性質および世界史、社会、文化図版に対する新たな理解が生じ、または人類中心論の上で成立してきた地球不良生態発展史を批判するための、一つの鏡のようなものを提示することができるであろう。

最後に表明すべきは、筆者の民具研究がまだ着手したばかりであり、現段階では長角ミャオ人における民具の考察と研究を行ったのみであるということである。しかし中国学界の民具学の成果はなお乏しいものであり、そのため民具の比較研究を行う条件はいまだ備わっていない。日本などの民具研究が進んでいる国の理論と方法を多方面にわたって参考・吸収し、中国の他地域を考察し民具誌を作成するとともに、比較民具学研究を行い、民具の理論的認識を高めることこそが、筆者が今後努力していく方向なのである。

#### 注

- (1) アチックミュージアム編 『民具蒐集調査要目』アチックミュージアム、1936年：三一書房 1972年、周星『民俗学的方法、理論と方法』商务印书馆、2006年、277頁から再引用。
- (2) 宮本馨太郎 『民具入門』慶友社、1990 [1969]年、9-15頁、周星『民俗学的方法、理論と方法』商务印书馆、2006年、277頁から再引用。
- (3) 宮本常一 『民具学の提唱』未来社、1979年、75-77頁、周星『民俗学的方法、理論と方法』商务印书馆、2006年、277-278頁から再引用。
- (4) 岩井宏實 『民具の博物誌』河出書房新社、1994年、189-194頁、周星『民俗学的方法、理論と方法』商务印书馆、2006年、277-228頁から再引用。
- (5) 張紫晨主編 『中外民俗学詞典』杭州人民出版社、1991年、193-194頁。

- (6) 許平 『「中国民具研究」導論』『浙江工芸美術』2003年、第1期、專論、1頁。
- (7) Raymond Firth 著、費孝通訳 『人文類型』『費孝通訳文集』(上) 群言出版社、2002年、339頁。  
——Raymond Firth 1958 『Human types: an introduction to social anthropology』New American Library  
1958
- (8) 長角ミャオ人が葬送儀礼で用いる竹で作った臨時の祭屋。
- (9) Raymond Firth 著、費孝通訳 上掲、340頁。
- (10) 安麗哲 『符号・性別・遺産：苗族服飾の芸術人類学研究』知識産権出版社、2010年、112-113頁を参照。
- (11) 天野武著 『庶民生活的見証—民具』、王汝瀾他編訳 『域外民俗鑒要』寧夏人民出版社、2005年、130頁。